

# 大飯原発地震動見直し不要

## 規制委、再計算を了承

原子力規制委員会は13日、定例会合を開き、過小評価の可能性が指摘された関西電力大飯原発（おおい町）の基準地震動（耐震設計で目安とする揺れ）について、現状のまま見直す必要はないとした原

子力規制庁の再計算結果を了承した。

規制委の島崎邦彦前委員長代理が6月、退任後に始めた研究で過小評価の恐れに気付いたとして、規制委に再計算を提案していた。大飯原発の

基準地震動は最大加速度8.56で、島崎氏が在任中に指揮した審査で了承された。今回、規制庁が別の計算手法を用いた再計算では最大加速度6.44だった。島崎氏の後任として地震、

明委員は「基準地震動は安全側に見込んでおり、再計算結果はその範囲内だった。改めて計算して良かった」と述べた。

大名倉教授らが提唱し、震源側の断面面積から地震規模を算出する「入倉・三宅式」を、大飯原発の震源など地表に対して垂直に近い断面に適用す

計算した。規制庁は今回、断面の長さに着目した武村雅之名古屋大教授の「武村式」を使って再計算した。

## 新知見の反映方法 課題

規制委が過小評価の可能性を指摘された大飯原発の基準地震動を再計算し「見直す必要はない」と判断したこと、大飯3、4号機の審査で懸念

材料はなくなった。再計算は島崎邦彦前委員長代理の指摘だっただけに「例外的」（田中俊一委員長）に受け入れた形だが、熊本地震などの新知見を今後どう原発の新規制基準に反映していくかは不透明な部分もある。

験所教授（地震工学）は「島崎氏の指摘を具現化する計算としては間違っていない」とした上で「入倉・三宅式がダメで武村式が良いというのではなく、ばらつきをどう考慮するかが重要」と指摘した。

## 大飯原発

# 基準地震動 過小評価だ

16.7.16 M 毎

## 島崎前委員長代理

## 規制委に反論



島崎邦彦氏

小評価は間違いない」とし、規制委に計算のやり直しを再び求めた。規制委は13日に再計算結果を示し、過小評価はないとの見解を発表したが「再々計算」を求められた格好だ。

規制委は、再計算では最大で6.44が（分ルは加速度の単位）で、基準地震動の8.56を下回ったとしていた

が、島崎氏は「自分は納得しておらず、誤解だ」として、急きょ反論の会見を開いた。

田中委員長は13日の記者会見で「一番影響が大きい大飯は（再計算を）行う必要はない」と強調。過小評価を指摘された「入倉・三宅式」を大飯と同様に使っている高浜原発も、対象となる活断層から距離が遠いため再計算する必要はないとした。

島崎氏は今回、熊本地震でも過小評価の問題が確認された知見だと訴えた。ただ、熊本地震の知見について釜江教授は「学会の場で今後さまざまな解析結果が出てくる。新基準にどう反映していくかは精査が必要で、時間も掛かる。規制委も科学的な裏付けがないと取り入れられない」と述べた。

関西電力大飯原発（福井県）で想定する地震の最大の揺れ（基準地震動）について、過小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

小評価の恐れを指摘している原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦氏（東大名倉教授）は16日、東京都内で記者会見し、「過

（青木伸方）

# 規制委不適切と認める

## 評価方法は変えず

関西電力大飯原発（福井県）の地震動を巡り、過小評価している主張する原子力規制委員会の島崎邦彦前委員長代理と田中俊一委員長らが十九日面談した。田中氏は、規制委による再計算が不適切だったと認めながらも、従来の評価方法は維持する考えを示した。二十日の定例会合で、五人の全委員で協議する。

島崎氏は、関電が用いた計算式だと、垂直に近い断層では地震動を大幅に小さく評価すると指摘。規制委は別の式で再計算し、関電から、十三日の定例会合で

は、大飯原発が想定している地震動は妥当で見直す必要はない、と判断した。十九日の面談は、規制委の判断に異論を唱えた島崎氏から直接意見を聴くために開かれた。席上、再計算を担当した職員らは、式を変えようと、断層の総面積よりも、ずれて強い揺れを生

む部分の面積の方が大きくなるなど多くの矛盾があり、再計算の結果は無理に出した数字だったと明らかにした。この説明に田中氏は「できないことをやってしまった。前の委員会ではいだろうと申し上げたが、そこも含め議論する必要がある」と述べた。

# 大飯の地震動再議論へ

## 規制委「過小評価」指摘受け

原子力規制委員会は二十日の定例会合で、過小評価の可能性が指摘された関西電力大飯原発（福井県）の基準地震動（耐震設計の目安となる揺れ）について、指摘を受けて行った再計算の精度に問題があるとして、議論をやり直すことを

決めた。規制委は十三日の前回合で基準地震動を見直す必要はないと判断したが、計算手法に関する事務局の原子力規制庁の説明が不十分

だった。田中俊一委員長は「規制庁はデータをそろえて説明してほしい。その上で議論したい」と述べた。次回以降に再度、議論する。

過小評価は前委員長代理の島崎邦彦・東京大名誉教授（地震学）が指摘。規制庁は島崎氏の提案に従い、別の計算手法を取り入れて再計算を実施。計算過程で

断層面積などの設定に矛盾が生じたが、無理な仮定を重ねて計算した結果、審査で了承済みの最大加速度八五六ガルを下回る六四四ガルを算出したという。